



♣ 百店会のマークはこんなマークです。



港まちKOB Eのクリスマスにユニークな神戸の銘店の集い「神戸百店会」から皆さまにクリスマス・プレゼントをお届けします。
いろいろなお店からのプレゼントです。どんな賞品が当たるかわからない楽しいクイズにどしどし応募ください。正解者多数の場合は抽選でクリスマス・プレゼントをさしあげます。

クイズ問題

♣ ご存知の百店会のマークを店頭に飾っているお店を、5店選んで店名を書いてクイズ係までお送りください。

♣ 官製はがきを使って下さい。
クイズ締切は12月24日です。

♣ 24日消印のものは有効です。
抽せんの発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。誌上発表は2月号にいたします。

♣ クイズのご解答は左記の宛先でお送りください。

神戸市葺合区御幸通
8丁目神戸国際会館一階
月刊 神戸っ子内
神戸百店会クイズ係



各種産業菓子博に於て
大臣賞他受賞多数

お歳暮・ご贈答に

神
々
名
物

瓦
せん
餅
以

欧
風
煎
餅

ク
リ
ム
ハ
ッ
ピー

ク
レ
ーム
ハ
ッ
ピ
ロ
ン

創業明治6年

龜井堂總本店

本店 神戸元町通6丁目浜側 ㊤ 0006 ㊤ 0151
売店 神戸/三越、そごう百貨店 大阪/阪神甘
辛のれん街、近鉄百貨店、松坂屋百貨店 東京/
小田急百貨店、小田急のれん街、新宿ステーシ
ョンビル有名物産内 九州/小倉東映、博多民衆駅



マキシン
美容室
神戸店

秋から冬への美しいヘヤー
モードは、ゆったりとシッ
クなムードのマキシン美容
室をご利用ください。

Maxine Beauty Shop

神戸・三宮神社前三上ビル3階 電 ㊤ 4 9 1 7
西寺尾店 (文化センター内)・横浜元町店 ㊤ 0312
軽井沢店 2771・博多大丸美容室・香港大丸美容室

Merry Christmas



X'MASパーティ、忘・新年会の
ご予約を承っております
お早目にお知らせ下さい
係員が参上いたします



GRILL COFFEE スリースリー
TEL 333 1070-1

充実した内容の当店X'MAS DINNER券をどうぞ
(12.23日～12.26日)

☆プレゼントに、御贈答用に美しいパッケージを用意
致して居ります。

-A¥1,000-
スーパ (コンソメ)
若どりのロースタ
シーズンサラダ
ペパーミントジェリー
コンパターヒー
お 土 産

-B¥2,000-
シヤンパン 1 本
オー ド ブ ル
スーパ (コンソメ)
冷・車えび マヨネーズ
七面鳥のロースタ
アスパラガスサラダ
ペパーミントジェリー
フルワ・コーヒー
パン パ タ 添 産
お 土

恋人の
ために、ハズ
のためにスタイルア
イの品々は世界のエリート品ばかりです。
NOTICE!! 12月18・19・20・21・22・23・24日の7日間、スタイルビル4階でX'MASパ
ンセールを開催しております。ぜひどうぞWELCOME!!!



クリスマスの贈り物にはスタイルアオイの舶来品をどうぞ!
イタリアのバッグ・財布・コンバクト・宝石箱、オーストリー・ドイツのアクセサリー、スペインの
手袋・コートETCの皮製品、フランスのスエター・ニットスーツ・オーバーコート、
アメリカのムンシンクウエア、デンマーク・
スエーデン・北欧の人形・木製品……。
プレゼントに最適です。
お値段も手頃。

STYLE aoi

三宮センター街1丁目
スタイルビル TEL 39-3985

サンタクロース・ア・ゴーゴー……………

永井

明



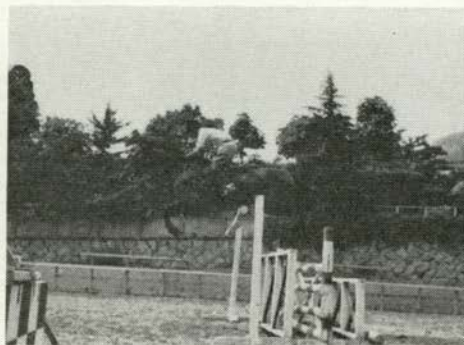
神戸遊戯誌

28

川田、佐用両氏とも五十五歳を越えても馬術には目がなく、今日でも川田は週に三、四回、佐用は毎日、雨でも午前六時から七時までの一時間乗らぬと気がすまぬほどの熱心さだが、神戸乗馬クラブには、以上述べた老人組のほかにも熱心な青壮年組や女性がたくさんいる。なかでも、学生会員には毎日欠かさず同クラブに馬事訓練



昭和37年7月、日韓親善馬術大会関西選抜チーム黒いユニホーム左から佐々・本野・江畑・勝本各選手



神戸乗馬クラブ練習風景佐用氏（青谷にて）



昭和40年11月全日本馬術大会、選抜中障害に優勝した勝本選手

にやってくる人々が多い。大学では甲南大、関学、神大がめだち、高校では甲南と神戸高校、中学は甲南といったところ。終戦後一時、兵庫高校と灘高校にも馬術部があったが、現在は無い。そして、馬は現在一頭四十万円もするが、これらの学校のほとんどは数頭以上の馬をそれぞれ学校に置いている。

馬術 ②

青木重雄

次に、外人組では、プロ野球のバンサイド投手の夫人やバーカー夫人（アメリカ・ペンシルバニア石油支店長夫人）グラシアニ氏（アメリカ綿花輸入検査員）はじめスイス人、インド人などがある。また、日本女性では、植田佳世子（佐用氏のお嬢さん）宮崎康子（デザイナー）のほか女学生が多く、関学大を筆頭に松蔭、山手、聖心、海星などだが、学生のほとんどは個人の資格で参加している。優秀な騎手では、関学OBの佐々信三（現在は転勤のため東京）本野善一、勝本正則らがいる。佐々は昨年の東京オリンピックの馬術競技に出場して最高点を獲得したが、優秀騎手の条件であるところのずば抜けた技術のうえに沈着さと勇猛果敢な精神力を兼ね備えていた彼の文字どおり、人馬一体の妙技は全くすばらしいものだった。使用馬はサラブレッドと交配の日本馬だった。本野も同オリンピックでがんばったが、おしくも最終予選で落ちた。なお、競技の時は人体の目方は一定量（七十キロ）はないといかんことになっているため、定量不足の場合はクラに重いナマリを巻きつけて出場することになっている。他に安部重信（外科医）田中明（歯科医）杉本茂（兵庫県庁診療所）の三人の医者グループがいるが、なんといつでも変わりダネは、当年六歳のアメリカ坊やがいること、日本人の小学生も二、三人いる、数年前、同クラブで職場ならぬ馬でめでたく結ばれた乗馬結婚の蔵元幸保夫妻がいることもつけ加えたい。さて、他のスポーツ競技と違って乗馬は相手が馬であるだけに、いくら自分だけが力んでもダメで、戦時中「愛馬進軍歌」の文句のように、「とった手綱（たずな）に血が通う」にならなくては、みごとな乗りこなしを果たすことはできない。だから、馬をやる人はだれも「本気」になる。つまり、馬と自分の呼吸を合わせるために、他のすべてのことを忘れて精神を一つに統一する一つまり、無我の境地に達することが絶対必要なわけだ。動物のうちでも馬は特に神経質であるだけに、騎手は特別の心構えが必要となる。それには馬への日ごろの

愛情が第一条件だが、「以前に自分の飼っていた馬が、うっかりしてあけていた馬舎から勝手に出ていったことがチョイチョイあったが、まるで自分の心配を知っていたかのように大抵は帰ってきたものです」と川田会員は目を細めて語っている。といって愛情一点張りではナメられる恐れがあることは、飼い犬や飼いネコ以上にむずかしいところである。馬に乗ると血圧が下がるそうだが、これはあながち恐怖心からというのではないとのこと。（精神統一で雑念が血圧といっしょに下がる、というわけ？）馬の平均年齢は十五、六歳から二十歳までだが、いちばん乗馬に適しているのはオスでもメスでも六―八歳。（オスはこの時期に去勢する）陛下や皇太子は十歳馬ぐらゐの安全馬に乗られるのが普通である。

全国の乗馬人口は一万人ぐらゐで、東京、北海道、東北はじめ関西では兵庫、京都、九州などが活発である。他のスポーツと比べると人口では話にならないが、戦前戦後を通じて国際的には日本の有望なスポーツ競技の一つであることは事実である。世界の馬術国といえば、ドイツ、イタリア、フランス、ソ連、イギリス、オーストラリア、アメリカ、蒙古などだが、わが国も質的には捨てたものではなく、なかなか将来性があるから、次のメキシコ・オリンピックまでに乗馬人口をうんとふやしてがんばってもらいたいものだ。一方、国内だけでも、毎年全日本、関東、関西、九州、学生などの数々の選手権があるから、今後の兵庫勢の活躍をあわせて期待したい。現在、県下には神戸乗馬クラブのほかには姫路乗馬クラブ、西宮の金鈴（きんれい）会、六甲山上の六甲山牧場乗馬クラブなどがあるが、六甲山などは最近では若い女性が多くなってきたから、ここにも時代の流れが感じ取られる。もともと乗馬はわが国では軍隊（戦争）用から社交用へ、社交用からスポーツやレジャー用へと進んできたもの、競技（競馬も含んで）以外にレジャーとして、もっと多くの人々に楽しんでもらいたい気がする。

神戸うまいもん巡礼

No. 40

赤尾 兜子

すしの巻

すでに前に、いい店をいくつも書いたが、今月はその補足としておきたい。

神戸での「にぎり」の元祖で、すし職としても元老格の「与兵衛」（生田区元町一丁目）を忘れることはできない。

主人の山下常吉さんはいささか身体をいため、最近息子ににぎらせているが、それでも常に店にいる。もともと会席料理のすしで腕をみがき、昭和八年、東京両国の「与兵衛」がなくなったので、かつて職人をしていた昔をしのんで二字をもらいうけて店名にした。当時まだ神戸には、にぎりずしの店はなかった。昔の職人修業はいまではおよそ想像もできないほど厳格なもので、常吉さんの後頭部には、まだ、その昔、師匠から受けた包丁の傷跡が残っている。なにしろ、研究熱心で、いろんなすしをあみだした。きゅうり巻きを作って全国へ普及したほか、キャビアのにぎり、フグ、幕の内のにぎり、そしてノリの上にご飯を敷いて、つくだにを入れてまく名物「逆巻き」も考えだしたのである。

むろん車エビ、タイ、イカ、あなご、あわび、しゅんの魚をネタにしたにぎりもある。関西の味覚をこよなく愛した故谷崎潤一郎氏がかつて阪神間にいたころ、たいへんひいきにした。また山下さんは無名のころから双葉山（現時津風）の大的ひいきで、それで時津風から大阪へ店を出す一切の面倒をみようという話が出たくらい関取衆ともなじみ深い店であり、主人である。

カウンターで席は十人前後、よくまとまった感じの店

レモンやしょうがもぜいたくにそばにつく。そして、にぎりのひとつひとつが、いわば生きた作品、見せ場でつくろったのではなく、味そのものが、それぞれに個性的な印象をとどめる。いくどか、私はこの店はゆきずりの客は避けたがよいと書いた。それで、飛びこみ客はほとんどなくなったようだが、一級品の賞味を志す人は電話で予約して、ゆけばよい。一コース二〇〇〇円から一人前六〇〇円。

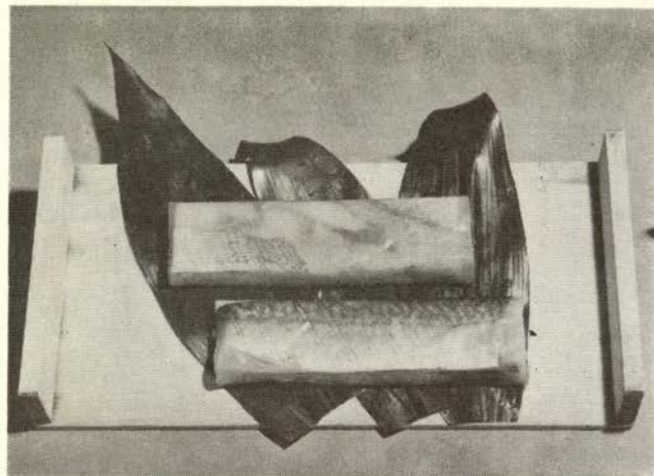
一方、矢倉ずし（生田神社前と元町一丁目）は大阪ずし、つまり箱ずしの伝統を守っている店として神戸では貴重である。「矢倉」という名が、大阪の五座の矢倉から出たことから考えてもわかるのだが、慶応三年の創業もともと大阪の心斎橋にあった老舗で、戦後、主食加工の許可が大阪でなかなかおらず、神戸の方がゆるやかだというので、ついに店を神戸へ転じたのである。

二代目が、明治初年サバの押しずし「ばってら」を創案、三代目が蒸鮎（むしずし）を機械化し、冬の心斎橋名物としたが、いまは四代目。したがって、この店の本命は、やはりばってらであろう。ばってらというのはオランダ語のボートという意味で、形が舟に似ているところから、そう名づけ、その後にはうすい白板こぶをのせ「松前ずし」としたので、いまではこの兩名がごっちゃになって使われている。たい、さば、あなごである。さばは、主として日本海のものを用い、すしにするのに十二時間かける。下品なものは、くさが口に残るが、そこはうまく消してあって、なかなか味深い。こんぶの

たきつめ方も妙。たいには、木の芽があしらわれ、みた目にも美しい。あなごは高砂産、大きさもそろったものをえらび、うまい煮つめ方で、あがった色目もよい。たい、四〇〇円（一五〇円）さば、三〇〇円（一二〇円）あなご、四〇〇円（一五〇円）客に手ごろなようにとふつうより小さいカマボコ大のものも作っており、その方が値も安い（値はカッコ内）

むろん、にぎりもある。元町店は、三十四年からプラスチックのケースのなかに入れた魚に、値段表をつけ、食べるたびに、値段札を客の前におくプラスチックシステムを採り、急ぎの客に、食べた分の暗算ができる新趣向をやっている。

大阪すしの伝統を守る一方、新時代の客にアツピールする方法も考える新旧の二本立経営。しかも私が聞いて



矢倉すしの名物箱すし 上がたい 下がばってら



独特の個性と味覚を誇る与兵のにぎりすし

いるところでは、六甲にすし工場を持ち、すしの卸売りを目ざす一方、四代目の社長、豊津貞蔵さんは、すしの革新にも意欲的で、何でも腐らない輸出用すしを考案、目下輸出を準備中で、来年一月から国内売出しも計画しているということである。特殊フィルムの方クロに入れたすしを、フクロのままぬくめると、ちゃんとしたすしにもどるといのである。これはまだ試食していないので何ともいえないが、豊津さんのすしに対する考えは「にぎりはネタと米がよければ家庭でもできる。技術は関西すしにこそある」ということらしい。生田神社前の店は都市計画でやがて鉄筋の新築になる予定。総じていうとこの店のすしの値段は多くのすし店のなかで中クラスである。

紳士入門 ③4

How to be a gentleman

労働組合紳士

文・竹田洋太郎
え・石阪春生

「日本の労働組合主義」というものがあるそうである。それならば「日本の労働組合紳士」も多分あるはずである。いや、たしかに存在するのである。すでにわが国も労働組合が生れてから久しい。戦後だけ見ても二十年戦前からの労働の幹部もいるわけであるから、当然その中にも紳士はある。

その中で一人、記憶に残る人物がある。氏も戦前派でかつて陛下が行幸になったとき各界の代表とともに迎ええた。まだ男性のオシャレもむずかしい戦後で、代表者諸氏はみな、腹が出たためサイズが合わなくなったモーニングにかしこまっていた。ところが、ただ一人の紳士が仕立ておろしのピッタリ身に合ったモーニングに威儀を正していた。

そういえば、白髪美髯のこの労働紳士を思い出される人は神戸に多いだろう。もうなくなつたが。

ところが、最近はどうも服装の点で大労働指導者は個性に欠けるのである。ネクタイ絶対反対というなら、それもよろしい。一般に労働幹部の服装は極めてレベルアップしておるにかかわらず、組合員に対して遠慮でもあるのか、どこことなくミミッチイのである。むしろ良質の服装を見事に着こなしてこそ、現代の労働指導者であり、女性組合員のため息を引き出すことが出来るのではなからうか。そこで、いまベストドレッサーといわれるような労働幹部諸君（やはり諸氏というより諸君といった方がびつたりする）は、新しい紳士の典型であるとはめておく。

もちろん、諸君にもT（タイム）P（プレス）O（オケージョン）の原則は大切であつて、デモの先頭に

立つときは、いささかタビタ背広を着用に及び、頭の毛を振り乱すことも必要である。こんなとき、あまりキチンとしていると「彼は労働をやめて議員かなにかになったのか」と思われる。

服装のみならず、趣味においても豊かな労働紳士がふえてきたことも喜ばしい。その一つに、趣味というより一種の義務で全国の温泉場を研究しておられる向きもある。というのは、組合の全国大会はふつう温泉場で行なわれる。これは宿泊施設に恵まれているのと組合内部の派閥抗争も、湯につかちやっていると、あまりひどくならない、というおもんばかりによるようである。こうして、数日も労働幹部をつとめ上げると、自然に温泉通となる。そして、かつては大会のあとのレクリエーションはごく質素なものだったが、近ごろでは各単位組合ごとに民謡踊りを披露する必要にも迫られる。さらにグループの会合では、小唄の一つもうなつてみようということになる。

その際労働紳士としては、決して陰でこそこをやつてはいけな。別に堂々とやる必要もないが、奥床しさを示しつつ趣味の広いところを見せればいいのであつて、労働幹部だからといって別の態度をとるべきでない。一時、経営者間にゴルフ、碁、小唄が急激に蔓延したことがあったが、労働幹部として同様の好みをいだいて悪いわけではない。人生を豊かに楽しむ労働紳士を「労働貴族」だときめつけるような人物は、経営側でも労働でも出世する見込みのない人だと考えてよい。

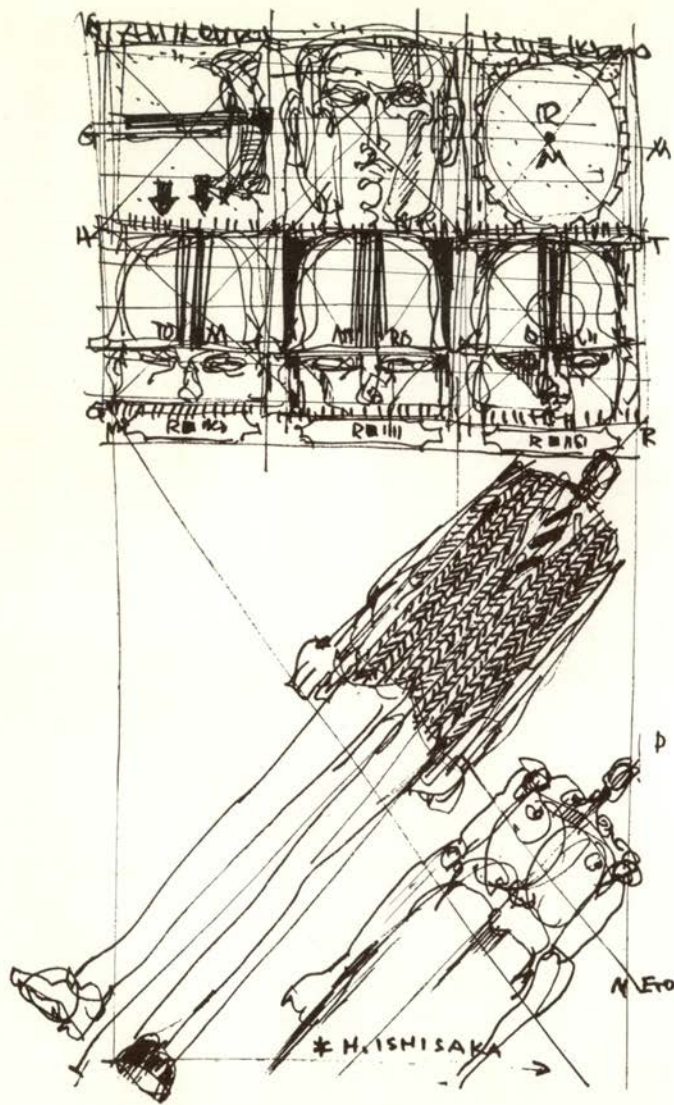
こうして趣味教養豊かにして穏和な労働紳士が出現してきたわけであるが、その紳士が経営者にとって扱い易

いかというと、逆である。たとえばアジ演説はうまいが経営者側の心理、政策を洞察できないような指導者より団交の席上、いつもニコニコ、会社の説明もよく納得してくれる、という指導者の方が、全く扱いにくい。紳士的で、しかも観察力にすぐれ、情報網をしっかりとぎっている人物には、会社側は泣かされるのである。こういう人物は同時に、労組員の心理にも通じており、調子にのって浮き上がることもない。つまり、経営者としてもすぐれているだろうと思えるような労組幹部が、ひょっとするとこれからの日本的労働組合紳士かもしれないのである。

そこで労組紳士を旨とする青年も近ごろはふえているの

であるからその模範となるべく努力せられたい。態度においては、仲間と一緒にいく大衆酒場でも、一流ホテルのバーでも変わらない優雅さが必要だし、ボルドーの銘酒の味もわかり、女子組合員の出入りするお好み焼屋のウドン焼きの味にも通じていなければならない。

しかも最近では有力労組の幹部の外遊があいついでいるが、外国では労組幹部はエリートであるのだからして堂々と振舞われることを期待したい。英国では功績ある労組幹部には爵位をさずかるのである。従って外国の首都の紅灯の巷を、同行の人たちとともにウロウロせず、一流の場所で一夜の清遊を楽しむことを心掛けられたい。





★神戸を楽しむ私のコース¹⁶

神戸の味覚を 楽しみましょう

射浜 フミ子

〈神戸銀行業務部〉

美しい緑の山々、すぐ足下に青く澄んだ海。船が港にはいる時の神戸の美しさを内外の旅客は絶賛する。再度山から摩耶山を経て六甲の峯々におよぶ山系の、あのすばらしい高原的な景観、そしてまた「源氏物語」に出てくる須磨。

この須磨は昔、一ノ谷、二ノ谷と呼ばれ、敦盛が青葉の笛を吹いた所であるように、ロマンチックな街でもある。

出船入船の多い神戸では外国人も、バラエティに富んでいる。そのためでもあるのだろうか、神戸の洋食店は本国人の経営している店が多い。そのひとつに大丸の南、明海ビル地下のイタリア料理店「ドンナロイヤ」がある。マスターのジュセッペ・ドンナロイヤさんは、生粋のイタリア人。第二次世界大戦で海軍に召集され、日本で終戦を迎え、そのまま神戸に住みつかれたとのこと。店の壁には、イタリアのナポリ、ヴェニスなど世界的に有名な観光地を題材にした絵が、たくさん飾られていて、ふんだんにイタリア気分というようなものに、接することが出来る。こ

こドンナロイヤのゆきとどいた本場料理は、安心して味わえる料理である。ご自慢のフィチーネ、ラサニエ、ミストローネがある。私は、イタリアの主食である麺類、さらりとした舌ざわりの、トマトソース・スパゲティを食べた。ドン



イタリア気分いっぱいのドンナロイヤ

ナロイヤを出て、三宮センター街の人ごみの中のひとりとなった。甘党である私の足がむくのは、生田署山側のチョココレートで有名な「コスモポリタン」。フェルド・D・モロゾフさん父子がトアロードに、味も値段もびつくりするほ

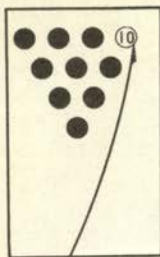
ど高級な「モロゾフチョココレート」の店を開いたのは、大正十五年。材料を世界各地より集め、最新の技術を輸入して、世界的水準をめざす。自慢のゼリーをチョコレートで包んだもの、ミルクたっぷりの板チョコ、洋酒ボンボン、キャンディも高級でバラエティに富んでいる。適当な照明、適当な静けさを持つている奥の喫茶室で、栄養満点でスタミナのとくという、ホットチョココレートを。

センター街のはずれにある「さちかタウン」へ入った。まずスイツタウンでお土産を買った。そして、ファンシータウン、ハイモードタウン、ファミリータウン、そしてメンズタウンを通り過ぎて、レディスタウンへ。ここでは、ただ目を見はるのみである。新しく神戸の名所となった。さんちかタウンを出ると、ポートタワーにも灯がともり、車のライトの彩どる「百万ドルの夜景」を作り出そうとしていた。

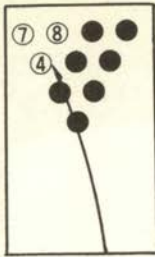
☆

☆

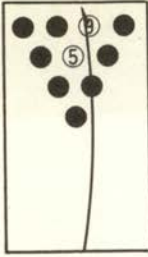
* スペアの取り方



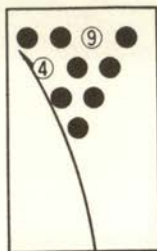
①10番ピンは左に寄ってピンに向かいます。



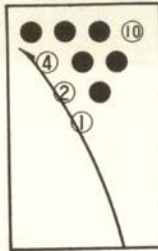
②4-7-8...右から4-8ポケットに投げるとボールは4-7-8に当たります。



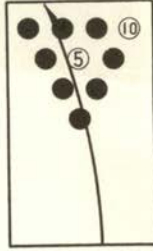
③5-9...ストライクの要領で投げます。



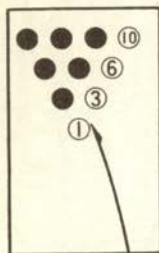
④4-9...右から四番に向かい、左側に当たります。



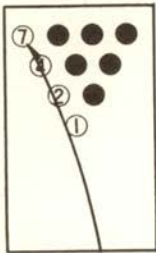
⑤1-2-4-10...右からやります。1-2ポケットを狙うと、2番が4番に当たります。



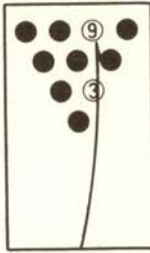
⑥5-10...いくぶん左へ寄り5番をカットするように薄くあてると、10番にあたる。



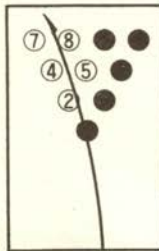
⑦1-3-6-10...普通の位置から1-3ポケットに投げます。



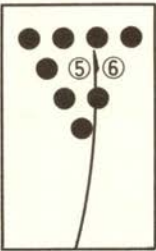
⑧1-2-4-7...ストライク・ポケットの右でも左でもかまいません。



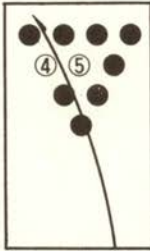
⑨3-9...2番の右四分の三とこに当てます。3-9...9番に命中させる。



⑩7-2-4-5-7-8は、2-5に強く当てると8番に当たります。



⑪5-6...左に寄り、5-6の間へ投げます。



⑫4-5右側にはめ込むように投げます。



ジャズスターレーン

神戸市生田区江戸町95
(花時計西側) TEL・39-4169

さんちがタウンの一角に
オープンした

UCウエシマコーヒーショップ

フロアぜんたいを

ラウンジ風にまとめ

赤とアイボリーホワイトが

心ニクイほどマッチした

しょうしやなティールームです

本場コーヒーの高い香りが流れる

UC上島珈琲本社直営のお店です

ブロムナードコーベ

ショッピングコーベを

愛してくださるあなたなら

ちよつとイキな神戸っ子なら

ぜひお立ち寄りください

UCコーヒショップ

若い人の間で

静かな人気を呼んでいます

UCウエシマコーヒーショップ

(さんちがメンズタウン)

TEL 3915677

0678

UCC上島珈琲本社直営

(神戸駅前) 341360679

ポケットジャーナル



大森実氏母校で講演

去る十一月十二日、神戸商大の文化祭で毎日新聞外信部長、大森実氏の講演会が行われた。大森氏はきつ粋の神戸っ子で同校の卒業生。多忙なスケージュールをさいて母校のために来神したわけだが、学生もそれにこたえ、世界を股に活躍



神商大で歓談する大森氏

する先輩の話を聞こうとつめかけ、定時の十時には、会場の第二講堂も座れない学生が出るほどの超満員。かつての恩師が、ズバリい

って大森君は秀才ではなかった」という紹介に、学生達は大喜び。さすがの大森氏もテレ笑いだった。

講演に入り、現代の世界情勢を分析し、日本の現代を考えるというテーマで論じたが、ベトコン問題にふれて「今までは軍事評論家の分析にまかせてきたが、これからは、むしろ民族学者にゆずるべきである」とちよびり皮肉もまじえ、学生時代のバンカラ振りを披露しながらの和気あいあいたるムード。

この後、同窓会での昼食会などをひかえ、四時の飛行機で帰京せねばというこゝとで自治会の学生の方が時間を気にするの、当の大森氏は「ひさしぶりの母校の壇上でこうして話をしているとなつかしい。時間はかまわん」と先輩ぶりを大いに発揮し、時間を忘れての楽しい熱のこもった講演会であった。

斗病の詩人の詩「竹の花」
湊中学でオペラ化、上演
市立湊中学校（桐村克己

校長）の生徒たちが、ハンセン氏病と闘う詩人、千家加寿さんの詩「竹の花」をオペラ化して上演したニュースは、多くの人の胸を暖めた。そして、生徒たちが上演したオペラの録音テープに激励の声を吹きこみ、写真をスクラップにまゝめて長島愛生園の千家さんに贈った後日談も感動を呼んだ。

この感動の波は、町にひるがり「もし他の学校や団体でやられるなら、喜んで台本をお送りします」という作曲の田尻彰男教諭、脚本の藤谷剛教諭のもとへ注文が殺到。「竹の花」運動を起こして救ライの輪をひろげたい」と意見を寄せた人もあるという。

伝え聞いた地元ライオンズクラブ有志も「台本をばらまくだけでも資金がいるだろう。せめてパンフレットをつくるお手伝いをしよう」と相談しているそうだ。こどもたちに愛の尊厳と純粋な魂を教えた「竹の花」は、いまいつせいに新たな芽を吹き出した感じである。

「落第生教室」の記録出版される

県立湊川高（定時制）の先生たちが「教師集団著」の名で本を出した。ほえろ落第生たち（部落問題研究所刊・新書版・280円）で、ご存じ「落第生教室」の記録である。この教室をつくった福地幸造教諭を中心

誕生日 ありがたう 運動



これは私達にあまり耳なれない言葉でしょう。この運動は健やかな体と心を思ふため私達が年に一度の誕生日にこの日頃忘れがちな幸福を感謝して、誕生日を祝う費用のなから、百円を節約し、精神薄弱児（者）のために献金し、この子たちの上にあたいたかき心を通わせよう、という願いをこめた運動です。この運動をすすめておられる神戸市立室内小学校の藤本隆先生にいろいろこの運動についてうかがうと、

「俗に知恵おくれの子といわれる精神薄弱児は、百名のうちに三、四名はいるのです。しかも、その子たちが知恵おくれとなる原因は先天的（遺伝）なものではなく稀で、そのほとんどは後天的な原因によるもの、といわれています。誕生日あたりがとう運動は、こうした思ふれな子供たちを、精神的にあたたかい思いやりのペルでつんでいこうという精神の運動、心の運動なのです。ですから、金銭的な面は二の次として健康な身体と心を思ふために人達に、精進者に対してもっている偏見をすて、精進者に正しい理解と愛情を育ててゆこうという運動なのです。人間の心にはいつも小さな愛と善意のともしびをいっつも消すことなく、燃やしつづけてゆくことを願っています」と話されています。

この運動にご協力下さる方は運動本部までお申出ください。
誕生日あたりがとう運動本部
神戸市東田区前原町一ー一
市立室内小学校内
TEL 〇九一七ー八

に、後藤和人教諭(国語)吉田弘教諭(数学)清水治郎記者(神戸新聞)らが膚に暖めるような思いで、札つきの問題児たちとの触れ合いを書いている。チンピラまがいの高校生が、人間的なつながりで目ざめていく過程の、いきいきとした事実。それは在校生より卒業生や教師仲間て飛ぶような売れ行きだが、学校の校長室にも『教育の本当の姿を改めて教えられた』といった手紙が、連日舞いこむそう。

氣勢をあげる裏六甲

湯の町有馬―といっても神戸市兵庫区。都心部の人たちが市街地改造などに関心を寄せている間に、でっかい計画をたてた。有馬温泉観光協会と同旅館組合が京大増田教室(増田友也教授)に頼んでいた長期開発計画調査ができ上がり、それをもとに生れ変わろうというのである。同計画によると十年後の昭和五十年には泊り客が倍増して年間百九十二万人。日帰り客二百十五万人。そのためには、若年層を誘致する必要がある。スポーツ施設を中心とした総合娯楽センターに―というわけ。鼓ヶ滝上流に二万平方メートルの人造湖をつくり、周辺にはゴルフ場、プール、体育館、スケート場、林間学舎…と盛り沢山。『六甲山のどてっ腹をぶち抜いてトンネルが出来た

ら一気呵勢に』と、裏六甲の神戸のハナ息は荒い。

花馬車に夢をつんで 人気あつめる元町商店街

元町商店街では、11月23日から、各店舗の店先にズラリと「花馬車」を並べてクリスマス・歳末商戦を開始、きれいな淡いピンクと白にぬりわけられた夢のような花馬車はメルヘンをさそい元ブラ族に大変な人気を呼んでいる。こんな楽しいアイデアはこれからのどんどんやってほしいもの。



人気を呼ぶ花馬車

見本市船東南アジアへ

去る十月三十一日、第六次日本産業巡航見本市船、大阪商船三井船舶のさくら丸(一二、六一一総トン)の改装と展示品の積み込みが終り、三菱重工神戸造船所で関係者に披露された。

同船が見本市船として活躍するのはこんどで三度目。広い船内には約六百社

から一万一千点、総額一億八千万円におよぶ新製品がはいっぱい。この後、巡航見本市協会専務理事で先遣団団長の佐々木誠一氏、事務総長の田中宏氏が記者団のインタビューに応じ、「前回の欧州に行った時、大いに自信をつけた。今度の東南アジアへは発展ぶりを見てもらおうと同時に、ただ売らんかな主義だけでなしに、あくまで親善使節として、むしろ、リードしていくという立場をとりたい」と自信満々。

植物防疫ガスで 中毒患者続出

神戸植物防疫所の防疫官が輸出入農植物のガス消毒に長年立ち会っていたと言語障害など慢性中毒にかかっていることがわかった。このニュースが、十月中旬に人事院が、この種作業で初めて「公傷」と認定したことで知られたが、関係者には大きなショック。中村豊二さん(六〇)はメチルプロマイドによる中毒性球マヒ性と診断されたが、同じケースが前にもあった。

『二年前、バナナの青酸ガス燻蒸(くんじょう)作業をやっていたAさん(当時二七)が、作業中、防毒マスクを落とし、その日から体の変調を訴えた。Aさんは間もなく入院、背髄を侵されていると診断されたので全芭連、沖仲仕の組

★はいからコナー

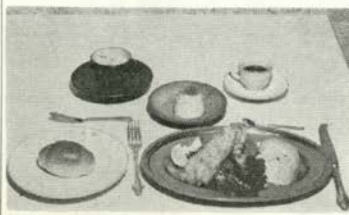
冬……。冷元を飾るスカーフが目立つ季節です。スカーフは柄よりも色で選ぶ、というのはお洒落のイロハ。今年はスカーフに少し手を加えてドレープをよせた帽子をつくり、頭をつつむのが流行。また同じスカーフを二枚もめてブラウスを仕立てたり、スカーフの中央に切りこみを入れて被り、ブラウス風にあしらってみるのも楽しいものです。

フランス製 ¥1,200-¥8,000
(さんちか Miki)



★ランチタイム

市電補公前にある白水寮、創立以来39年という古い伝統をもった店である。店内は一階から四階まであり、ゆったりとおもった雰囲気である。この店のランチはなかなかの豪華版でAとBがある。Aの方はカブススープ、魚・肉料理、パン又はライス、デザート、デミタス ¥400円、Bは魚なし ¥300円。メニューは毎日変ります。



合、病院 友人……と取材して廻ったのだが、ガス中毒という決め手がなかった。そのとき神戸植防へも問い合わせたのだが、事実を持っていないとケンもホロ口。なぜ、あのとき、念を入れて調査しなかったのか——神戸新聞のB記者は急激をもらしている。

半どん賞受賞者決まる
神戸の文化団体「半どんの会」(灘区篠原中町四ノ二〇、及川英雄方)の本年度半どん賞が決まり、十二月上旬、授賞式が行なわれた。受賞者は文化功労賞「内海定治郎さん(七十一)現代芸術賞(文学)「広田善緒さん(五十二)同(美術)「別車博資さん(六五)の三人。最高齢の内海さん「長田

区久保町九ノ四二」は、神戸女子商高の教諭。受賞対象は「五十年にわたる赤穂浪士の研究」だった。姫路師範時代、歴史の宿題で郷里赤穂の浪士伝をテーマに

として、その論文が激賞されたことがきっかけ。十七年かかって昭和八年出版した『真説赤穂義士録』(A5判、六百十ページ)が、現在『最も史実に近いもの』といわれている。

『有難いことです。武士道と義理人情「当否はともかく、ある時代の精神として、私は生涯かけてその真実をたしかめます」

目をうるませながら、いちずの情熱が報われた喜びを話す内海さん。いま「吉良上野介(弘文堂)など数

冊の出版を準備中だ。



TSUTAKA

ART WORKS 刊行

たえず、意欲的な作品を発表して話題を呼んでいる津高和一画伯が『美の生理』と題して画集を出した。

内容は、造形言語と内蔵言語の二部に分れており、内蔵言語がいわゆる「画集」で内蔵言語では、詩として文字で表現されている。造形言語以前の内蔵されているものという意であろうか。津高ファンにとっては、限定版だけに垂涎の的。

□百店会だより□

★神戸百店会は、神戸を愛する神戸らしいお店です。信用ある百店会加盟店で楽しいショッピングを、

★クリスマスプレゼントは楽しい夢の贈りもの。その楽しい夢をいっばいとりそろえているのが、オモチャの店、カメヤ。サンタクロースのおじさんが途中立ち寄ってオモチャを仕入れていきそうなお店です。各家庭のサンタさんもうどうぞ。

★忘年会、新年会で落着いた楽しいムードとおいしい料理を味わえるのがスペイン料理の店、カメルン。店内にローソクを立てての心にくいばかりの演出。予約をしておけばおみやげに色のついたかわいいローソクがもらえる。人数は二〇名までで、予算は飲物つきで一人八〇〇円ぐらいから。

★ハワイのサンタクロースが神戸にやってきました(?)といってもジョーウィンドーのお話。

花 時 計



昭和40年をおくる

昭和40年も今月でおしまいです。今年もいろんなことがありました。ベトナムの戦争、愚劣な日韓混乱国会、不況による中小企業の相つぐ倒産など、暗い出来事が多くてどうも世の中が明るい方向に進んでいるという気

がしないのはつらいことです。

ただ、嬉しいニュースが全然ないというわけではありません。朝永振一郎博士のノーベル賞受賞などは、日本人に新しい自信を与えてくれたトビツクとして、永く忘れないニュースとなるでしょう。

また、万国博の大阪開催決定も、東京オリンピックにつぐ国家的な大行事として、日本人に大きな目標を示してくれた出来事といえますが、目を神戸に移してみると、11月に行なわれた市長選挙

で原口市長の五選決定というニュースがあります。原口市長には、夢のかけ橋「完成という年来の夢があり、これだけなんとしても実現したいという情熱を燃やしているはずで、たしかに、これは神戸の未来を決する大事業です。同時に、身近な市民生活の充実についても、いっそうの情熱を注いでいたというように、これは来年の目標として、市政当局者の胸にしかと叩きこんでおい

(M)

この景品の毛皮大セイル、年内いっぱいやっていきます。あなただけのチャンスにぜひゴージャスな毛皮をお求め下さい。★カステラでおなじみの長崎堂本店は、今度、国鉄新長田駅西口の仮店舗で営業していましたが、建築中だったビルも出来上がり、大橋町五丁目の大五ビルに移転しました。今後ともよろしくお願ひ致します。

モルガンお雪

小山牧子 え・石阪春生

神戸は山麓にひらかれた街である。夜、海岸線から山の中腹へ灯の群落が、星々の祭典にも似たやはなかさできらめき登るその上に、墨絵のように静まり返った山頂があり、昼には、東西に細長く延びる市街の北で、時に遠く、ある場所では近々と、その折々の空の色によって紫紺、緑灰色にと色彩を変えながら六甲山系の山並がっらなっている。

旧市街の西端にあたる須磨から更に西へ、一の谷のあたりでこの連山は装いを一変する。磯の香と樹皮の匂いが一つになり、山が急な角度で海にせまり、国電と山陽電車の二つの鉄路と一本の舗装道路が通じているだけで平地も民家もない場所になる。

明治の始め、東海道線、山陽線の鉄道敷設の技師団の一人として来日していた英国人スミス技師は、この一の谷周辺の風光に魅せられ、山中の雑木林を伐り拓き、土をならし、数々の英国風の洋館を建てた。

スミス技師は建築に興味を持ち、故国で身につけた知識のすべてを注ぎ込んで、つぎつぎに新しい建物を建てては転売したので、その後、一の谷の山腹にひらかれた平地の上には、緑の木立の間から赤い屋根や破風がのぞき、最も高い場所に建てられている、洋館の尖塔が、底抜けに明るい空に突き刺さるようにそびえている。

そこは、西洋の見知らぬ街に迷い込んだお伽話の主人公のような感慨を、訪ずれる人に与える異人館の聚落で

ある。

一の谷には、そのようなエキゾチックな雰囲気になぐわぬ数々の暗い伝説があるが、すべて一の谷での源平の合戦にまつわるものである。

異人館のある高台から一番西寄りの坂道を下った所に海に面して建つ敦盛塚。最近の郷土史家の研究によると、平敦盛の墓地は別の所にあり、この石碑は源平の合戦で首をはねられた平家武者の首を集めて葬ったために「あつめ塚」といい、何年もの間に訛りに訛って「あつもり塚」と伝えられたとなっている。

前方を海に、背後を雑木林に、そして左右を水の濡れつきた谷にかこまれたこの土地では、家を建てても三代続かぬとかいう、まことしやかな迷信もこのあたりに住む老人たちのあいだでいいかわされ、それもひとえに、この谷底で折りかさなつて息絶えた平家の亡霊の仕業であるといわれたりする。しかし、実際にこのあたりが、かつての源平合戦の古戦場であるかどうか、七百年の年月を経たいま、目のあたりにそれらの歴史に触れてきたものは、そこに佇立する巨木と岩石だけなのではないだろうか。そしていま、そこには彼らのかたくなな沈黙があるだけである。

いまから約五十五、六年以前(明治四十三年)、この地にアメリカの大富豪と結婚して渡米したモルガンお雪が里帰りをして住んでいたことがあった。

当時、彼女は三十一才だった。

その家に住んだのは、ホテル住いを嫌った雪だけであり、彼女の夫ジョージ・デニソン・モルガンは、同じ時期、日本の美しい風光を訪ねて旅に明け暮れ、神戸に立寄った時はオリエンタル・ホテルに泊っていた。

雪が住んだ山荘は、モルガンと親交の厚かった貿易商フランクリンが本国に帰ったあとを借り受けたもので、彼女は生涯での数少い里帰りの期間を、十分に充実して暮したのであった。

野次馬根性の旺盛な日本人の興味の対象になり、どこへ行っても、日本中いやモルガンの故国アメリカでさえも羨望と蔑視を織りまぜた無遠慮なあつかいに翻弄されてきた雪にとって、一の谷は、その心の傷を癒すにふさわしい静かな場所であった。

初夏には、樹木が一せいに黒いほどに厚みを増した葉を繁らせ、背後の原始林では、山桃の実が褐色の果汁を大地の上にしたたらせ、深く切れ込んでいる谷への斜面一面に野茨や羊歯の群生する緑の海ができた。そして、斜面一面に、まるで紅玉を散りばめたように木苺の実が熟れるのであった。この木苺は小粒であったが、普通の木苺より酸味が少く、口にふくむとなんともいえぬなつかしさで心ゆすられるのである。

秋になると、山の中ではあけびの実も熟れた。着流しのゆかた姿で立っている雪の前を、あけびの実をしゃぶった子供達が、頬を紫色に染めて通り過ぎて行ったりする。

雪はそれらの風物をあきす眺めながら、一日一日をいとおしみながら暮したのであった。

明治三十七年一月、横浜のオリエンタル・ホテルでモルガンとの結婚式を挙げてから、すでに六年の年月が流れていた。挙式の翌日、国籍放棄届けを出し、モルガンにつれられて日本を去った雪であったが、異国での人種も言葉も違う人々の間で暮しながら、常に心の映幕に映し出されるのは、故国の山河であった。

雪の居室になっている山荘の二階、東南隅の部屋の外側には、この時代の異人館の特徴である温室のようなコロネードベランダがあった。異人たちの故国、特にイギリスでは、ベランダは吹き放しで建具がなく、霧深いロンドンやその他の街々の弱い日差しを無駄なく受け止めるように設計されるのであるが、彼等の風習も、日本の雨の多い風土をゆたかな太陽の輝きによって大きく変化させねばならなかった。明治の後期になると、異人館は改造され、腰張りのあるベランダなども現われてきたのである。

雪の部屋から、色硝子をはめ込んだドアを押してベランダに出ると、目の前の丈の高い葉桜の梢のむこうに海が見えた。その海は、いつも波一つない、その時々によって濃淡を変えはするものの、まるで色紙を張りつけたように、不思議に表情のない銀灰色に広がる瀬戸の海であった。

この海と向き合うと雪の表情はやわらかく影を帯びた。彼女の横顔は、その全体のなやかな肢態にふさわしく面長で弱々しいともいえるほどのやさしさにあふれていたけれど、その切れ長の一重まぶたのまなざしには強い意志の持主であることを感じさせるひらめきがあった。そして彼女は、つかの間、そのなやかな奥にひそむ強い意志が、堪えてきた過ぎた三十年の様々な喜びと苦しみの記憶をたどりはじめるのであった。

雪は、京都粟田口の刀鍛冶の家に三人姉妹の末娘として生れた。

明治初年、日本の文明が根底から揺れ動いた時代、はなはなしく発展してゆく産業のある中で、どうしようもない病果を持って息絶えてゆく老人のような家業の一つに刀鍛冶があった。武士階級の没落によって、彼等の需要によってのみなりわいを立てていた刀鍛冶は仕事を失った上、産業革命による手工業の機械化という新しい波に乗る才覚も彼等のほとんどが持っていなかったのだ、突然刀造りをやめてナベやカマを作ることでもできなかった

た。街の市場には、新しい機械から生み出された鉄製品が安い値段で氾濫していたから、雪の家でも手をこまねいてふいごをやめる以外に方法がなかった。

このようなうき目に合った場合、一番面白いのが雪の家のような中産階級であった。生涯、土をはいまわって生きる貧農や人足たちならば、草の根をしゃぶっても苦境を乗りこえるのであろう。しかし、耐える習慣を身につけていない雪の家では、次々に娘に左棲を取らせた。

次香、歌吉、雪。美しく生まれついた三人姉妹は、与えられた運命を従順に受け止め、祇園の芸者としての技能

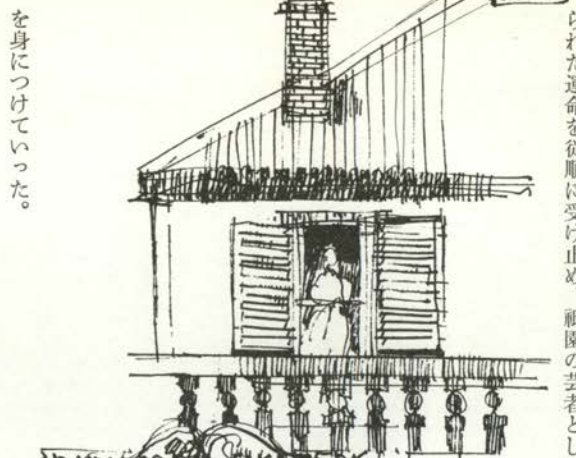
モルガンと雪が知り合ったのは、雪が二十才の時である。その年の加茂川踊りの下ざらえの舞台で胡弓を弾く雪を、日本に観光客として来日していたモルガンが見染めたのがきっかけであった。

その日以後、加茂川べりのボンボリに灯が入り、藍色の夜が重く祇園の街並にたちこめてくると、モルガンは四条縄手の小野亭に現われ、雪を所望した。

当時、小野亭は外人専門のお茶屋で、ここに入入りする芸妓は二流どころに限られていた。

「ユキサン。オネガイシマス。」

座敷にあがると、モルガンはだれに教えられたのか、たどたどしい日本語で雪を呼べとせがんだ。



を身につけていった。

雪は胡弓の名手であった。しかし、決して自分の才をひけらかすことはなく、特にだらりの帯の舞妓を花柳界の女王であるとする京都で、その年令を過ぎ、芸妓としては年増に数えられる年頃になってからは、つとめて目立たぬように、そっと若い妓の背後にひかえているつましい妓であったが、親密になればなるほど、そのやさしい人柄と肌の温みがほのぼのと相手の心に伝わってくるような女であった。

雪は、当時売れっ子芸者ではあったが、客の選り好みができるほどの一流でもなかった。

「お雪さん、異人さんにえらい好かれはって……。」

仲間同志の侮蔑的な陰口に閉口して尻込みする雪であったが、

「お雪さん、忙しおす。今夜は他の芸妓はんではいけ

まへんか?」

仲居の言葉に、モルガンが駄々っ子のようにボケツトから金をつかみだしてテーブルに放り出し、

「Why? (なぜ?)」ワタシ、ユキサンスキ。オネガイシマス。」

と座り込まれると、彼女はモルガンのお座敷に顔を出さないわけにゆかなかった。

漆黒の髪を高島田に結いあげ、抜き衣紋の首筋から頬へ青いほどに色白の雪が、それでも職業的な微笑で顔をほころばせ、モルガンのお座敷へ入ってゆく。三ツ指をつけて彼女は、

「今晚は、おおきに……。」

「オオ。ユキサン、アナタワンダフル!」

モルガンは、美しい人形を眺めるように、ガラス細工のような碧眼を見張り続けるのであった。

雪にとつて、言葉の違う国の男の座敷を勧めることは苦しい限りであった。話すこともなく、ただ見つめ続けるモルガンの前に座っていると、脇の下から額へじつと汗がにじんできた。

「お一つどうぞ……。」

「サンキュー。」

雪が差しだす銚子を受けてグツと飲みほすと再び沈黙の中にかえる。

「アイ・ラヴ・ユウ……!」

時々モルガンの口をついて出る異国語が、わけのわからぬ熱風として雪に吹き込んでくるようであった。

言葉だけでなく、風習の違う国に育った二人である。

モルガンの国では、愛する女の腰に腕を廻し、口ずけることも常識であるから、「愛している。」と語りかける男の前で、微笑を浮かべている雪を抱きしめようとするのも当然であった。

「アイ・ラヴ・ユウ・ユキサン!」

しかし、モルガンの手が雪に延びると、彼女は身をずらせて彼を避けた。

「堪忍しとくなはれ!」

「Why? (なぜ?)」ユキサン。アイ・ラヴ・ユウ。Why? (なぜ?)」

モルガンが追いすがった。

紅い裾を乱して、雪がお座敷を駆け出すと階段の下に小野亭の女将が立っていた。

「お母あはん!」

「まッ!雪ちゃん、やや子みたいになんどす。あんさん芸妓やおへんか。お客さんに楽しんでもらうんが芸妓の勤めどすえ。」

やんわりした言葉の奥に針をふくませ、女将は、雪を再びモルガンの座敷に追い返すのであった。

当時、雪には山下俊作という恋人があった。彼は京都大学の学生で、この恋は、雪の方から思いつめた恋であった。

激情的ともいえるモルガンの側にいると、雪には、時にはうらめしいと思うほどに冷たく取り澄まして、いつも机に向っている俊作への思慕がつつた。

「こないいうてくれはるのが俊作さんやったら……。」心に俊作の面影を抱きながら、モルガンに酌をする雪であった。

そんなある夜、思いつめたモルガンが雪にいった。

「ユキサン。ケツコンシテクダサイ。」

「勘忍しとくれやす。うち、好きな人おますんえ。」

しばらくの沈黙のあと、モルガンが再び言葉を探すようにして問いかけた。

「アナタ、アイシテイマスカ?ソノヒト。」

言葉もなく深くうなずく雪の前で、モルガンは、その碧い眼から不思議に透明な大粒の涙をポロポロとこぼし続けた。

つづく